第　１２０　号

平成３０年４月１日発行

寿楽院寺報

〒369-1245 深谷市荒川９８３
高野山真言宗　荒澤山 寿 楽 院
住 職　髙 橋 敬 行
電話　048-584-0302

～花まつり「いのち尊し」～

お釈迦様は「生き方」を説かれた実在の方

4月8日はお釈迦様（釈尊）の誕生日です。釈尊は「いのち尊し」と説かれ「尊いいのちをどう生かしたらいいのか」をお示しになられました。

生き方を求めるたくさんの人々の心に花を咲かせてきたこと、又折しも4月上旬は色とりどりの花の咲きほこるころであり、誕生の日を「花まつり」と呼んだのでしょう。「お釈迦様」という呼び名は古くから日本人に親しまれてきました。たとえば、職人さんが仕事をし損ねた時「オシャカ」といい、ことわざにも「釈迦に説法」などと。

ところで「お釈迦様って架空の方でしょ。」という人がいます。結論を申し上げますと歴史的に証明される実在のお方です。

今から約二千五百年前、インドの北側、ヒマラヤ山脈のふもとにカピラ国という小国があり、郊外のルンビニー園で一人の王子が誕生しました。釈迦族よりいでし、めざめし人ということで「シャカムニ・ブッダ」＝お釈迦様と呼ばれました。「前566年（前624、463年など諸説あり）釈迦族の王シュッドーダナ、王妃マーヤの王子として生まれた。名をゴータマ・シッタルダと云う。釈迦はマーヤの右脇腹から生まれ、その直後七歩歩んで、右手で天を、左手で地を差しながら『天上天下唯我独尊』といった故事は有名。」

「天上天下唯我独尊」とは

釈尊はお生まれになると、四方に七歩ずつ歩まれ、天と地を指さして「天上天下唯我独尊」と唱えられたと言う話は、よく知られています。無論、後代の人々が釈尊のお徳をたたえ、追慕の念をもって表そうとした創作でありますが、むしろ釈尊の生涯にわたって説かれた教えの真髄が語られているとうけとめるべきでしょう。ただ時折「世の中で自分一人尊い」とか「お山の大将おれ一人」と理解されがちですが、これはまちがいです。

東西南北への七歩のあゆみは「空間（社会）」を意味し、天上天下をさす指は、時の流れの中の「今」を表現しているとも思えます。その接点に立って「唯我独尊」の「唯我」とはすべての人にとっての一人一人の我なのです。「一人ひとりの存在は大変尊く、かけがえのない無上のものである」ということです。世界にたった一つしかない私のいのちを、今、どう生かすかを問いかける言葉であります。

4月8日寿楽院の花祭り

お参りください

仏教が生んだ日本語

冥福（めいふく）

葬儀の弔辞や弔電で「ご冥福をお祈りいたします」という言葉が使われるが、言うまでもなく冥福とは死後の幸せという意味である。冥とは冥界のことであり、仏教辞典によると、冥界とは「死後の幽冥の世界をいう。六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天）の中の三悪道（地獄・餓鬼・畜生）、特に地獄道に通ずる」とある。鎌倉時代以降広まった俗信における死後の世界である。閻魔とはこの冥界の王であり、閻魔王の前で、亡者の生前の善悪の業（行為）のすべてが鏡に写し出され、その罪の裁きを受けるのである。

ともかくも、冥福と言った場合の死後とは、亡者のさまよいいく所であり、地獄道に通じる世界である。望ましくない迷いの世界に死者を送り出して、そこでの幸せを祈るという行為は如何なものであろうか。「冥福を祈る」とは、死後の幸せを祈るということであり、何となく良い言葉のようであるが、死者に対する敬意を欠いた無神経な言葉ではなかろうか。この冥界は仏教の教えとは無関係な俗信であることを思えば、仏教徒は「冥福を祈る」という言葉を差し控えた方がよいのかもしれない。

空の言葉シリーズ

凡夫狂酔（ぼんぷきょうすい）して、羝羊（ていよう）のごとし

（秘蔵宝鑰）

●●●飲んだくれても自分が悪いと思わない人は、本能のままに食べ、性交にふける羊と少しも変わらない

弘法さんは、凡人のことを「凡夫」といわれます。「凡夫は狂酔して（酒を飲み過ぎて酒乱になったり、シンナーや禁制品を飲み過ぎて狂乱状態になっても）、我が非を悟らず（ちっとも自分が悪いとは思っていない）」〈人間、食い気と色気がなくなったらおしまいよ！　というけれど、美食を楽しむことと、セックスを楽しむことだけを考えているようなら、羝羊（精力盛んな牡の羊）とちっとも変わらないじゃないか。なんでも好きなことをするのは個人の自由だが、なにか一つぐらいは好きなものをやめてみる勇気がほしいとおっしゃっている。

伝言板

最悪の時こそ、最善を尽くす最大のチャンスである。